慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	子どもの時間的社会化 : 就学前教育のフィールド調査から
Sub Title	
Author	大久保, 心(Ökubo, Shin)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2018
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.86 (2018.) ,p.103- 106
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2017年度博士課程研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000086-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

子どもの時間的社会化
―就学前教育のフィールド調査から―

大久保　心

1．問題の所在

本研究の目的は，個人が所属集団内で時間のルーティンやルールを身につける過程である「時間的社会化」が，就学前教育現場の園生活で生じる様相について解釈的アプローチで明らかにすることである。

われわれの社会は，「行為が時計によって計られる時間（クロックタイム）にもとづいて相互に調整されていることによって成り立っている社会」（浜2013: 234）である。それは学校生活においても例外でなく，小学校に入学して以降，子どもたちは決められた時間割を一斉に経験するとともに，宿題を通じた学校外での時間管理を自然と求められるようになるため（Moore 1963＝ 1974），こうした学校文化に適応できるか否かが，その後の学力や教育達成などに影響を及ぼす可能性がある。また，胡中（2017）により父母の社会階層が中学生の生活時間に与える影響が示唆されたが，これは時間的社会化がP. BourdieuやB. Bernsteinらによって論じられてきた文化的再生産と関連しうることを意味する。

このように時間的社会化は，現在の日本社会において不可避な現象であるとともに，格差の再生産をめぐる議論と関連しうる要素でもあるため，その過程を把握することには大きな意義がある。そして，クロックタイムに基づく学校文化への適応の如何が，就学前教育における園生活の時間的社会化を反映していると仮定するならば，文化的再生産が出身家庭とともに出身園のハビトゥスの影響を受けると考えられるはずだ[1)]。しかし，そもそも就学前の子どもが集団生活を通じてどのように時間的社会化を経験するかについては，これまでの社会化研究では検討されてこなかった。そこで本研究では，これまでの就学前教育の現場を対象とした社会化研究で焦点化されてきた日常的相互行為に着目し（清矢1983; 柴野編1989; 結城1994; 芝田2005; 森2009など），就学前教育施設の現場における園児や先生[2)] の日常的な相互行為場面を対象として，時間的社会化の原初形態について検討した。

2．方法

本研究で用いたデータは，2015年9月から2017年12月にかけて実施した，認定こども園X園と保育所Y園および保育所Z園の3園におけるフィールドノーツにもとづく観察データと，先生を対象としたインタビューデータである[3)]。一般的な区分と同じく，3園では大まかに0～2歳児と3～5歳児の間で区分されており，本研究では就学に近い学年である3～5歳児を対象に観察を行った。

観察やインタビューを通じて扱うデータの焦点化を行ったところ，クロックタイムにかかわる相互行為が多く見られる，後に集団活動を控えた場面の分析に至った。分析方法として，1960年代にB. GlaserとA. L. Straussによって提唱された質的調査法に修正を加えた「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）」（木下2003）を援用した。

3. 結果

各園のクロックタイムに基づく時間規律をめぐる相互行為場面を分析し3園の共通点をまとめたところ，図1のようにデータから得た概念やカテゴリーの関係を示した結果図が形成できた。本報告書では，紙幅の制限があるため，具体的なデータの例示なしでの説明を行う。

園生活では，朝の会や帰りの会，昼食準備など，クラス単位で園児集団全体が同じ活動を行う場面が見られる。集団活動に向かって移行する場合には，その時点での行動に一旦の区切りをつける必要があり，園児自身に区切りまでの見通しをつけてもらうという先生側の意図からも，先生によりアナログ時計を用いて「長い針で5まで」や「1時25分まで」などの予告がなされることが多い。ただし，その前提として園児が1～12の数字を認識することが前提となるが，調査対象の3園とも3歳児の段階で認識できているということであった。先生と園児の間でアナログ時計を用いた目安時間の共有が行われると，目安時間の象徴であるアナログ時計の長針や時刻が，その場にいる園児や先生の行動の基準となる。つまり，先生の恣意的な合図以上に，アナログ時計の表示に正統性が生じ，時間規律を守る園児にも正統性が備わることとなる。

園児が時間規律に沿わない場合，「長い針が5になったのに○○していない」といったようにクロックタイムを介して逸脱が可視化されてしまうが，時間規律からの逸脱は園児集団全体ではなく，個人単位（もしくは部分的な園児集団）で生じる傾向にある。そこには，ある園児の逸脱が他の園児集団に支障を与えるかどうかが先生の基準となっている側面もあり，園児全体で時間規律を守らないことは逸脱として表面化しない事情があった。さらに，時間規律を守らない／守れない園児に対しては，「決められた時間が来たから」というクロックタイムの正統性ではなく，「他の園児たちに迷惑がかかる」という理由が先生により用いられ，説得の材料となる。先生はクロックタイムに合わせた行動をしない／できないことにネガティブな態度を示すため，園によっては，4歳児と5歳児において友だちや下級生に対して，集団からの逸脱や先生からの注意を防ぐかのように，目安時間の到来を知らせる園児も少数ながら存在していた。ただし，園児がクロックタイムに合わせて行動することは，先生にとっての教育上のねらいではないため，園児の活動と時間を調整する場面で，園児の意思尊重と集団活動のバランスをめぐる葛藤を先生に生じさせることも少なからずあるようだった。

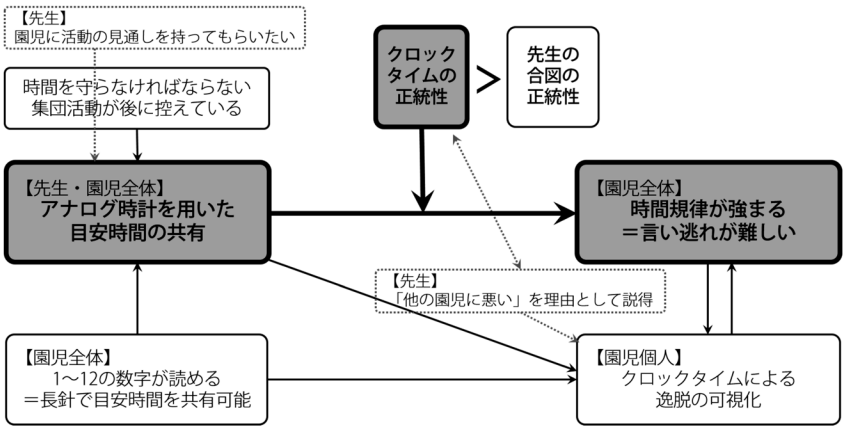

図1　時間規律の社会化過程のフィールドデータに基づいた結果図[4)]

4. 今後の課題

本研究の結果から，就学前の子どもについて，園生活内の先生や園児の日常的相互行為における，クロックタイムをめぐる時間規律の受容および逸脱の過程に時間的社会化の実態を見いだすことができた。この点は，「子どもがどのようにして特定の文化的アイデンティティを獲得するのか」とともに，「その過程とそのようなアイデンティティに対して子どもがどのような反応をするのか」の両方を含む，というBernstein（1971＝ 1981: 212）の社会化概念に沿うものといえよう。そして，時計が表示する長針や時刻は，集団生活における相互行為を通して園児たちの時間規律の受容と逸脱における視覚的象徴としての重要な役割を果たしており，子どもたちは時計の針や数字に付与されている社会的な意味を次第に身体化していくものと考えられる。つまり，子どもたちは他者と時間を合わせる「共時化」（Moore 1963＝ 1974）を就学前教育の段階から日常的に身体化しているといえよう。ただし，このような時間的社会化の過程は一様ではなく，所属する園や担当する先生，普段の仲間集団により差異が発生する余地には留意すべきである。しかし，本報告書では園同士の差異について認識をしつつも，データに基づく差異への言及はあえて避けた。それは，園長といった責任者および先生の教育方針が園の教育内容に強く作用する日本の就学前教育の多様性から考えれば（Holloway 2000＝ 2004），園同士の差異については容易に指摘しうることであるため，差異の性質や程度については園の教育方針，所属園児の家庭の状況を踏まえながら慎重に提示する必要があるからだ。

そこで，今後の課題は，本研究で十分に検討しきれなかった次の2点に集約される。一つは，教育機関をめぐる社会化と文化的再生産との関連の理論的精緻化であり，もう一つは，所属する園や担当する先生，仲間集団による時間的社会化の差異が生じるメカニズムの把握である。これらにより，社会化研究のさらなる深化につなげていきたい。

5. 関連業績

（学会発表）

大久保心，「保育者のタイムマネジメントと保幼小接続」，日本時間学会第9回大会，山口学芸大学，2017年6月.

大久保心，「就学前教育における子どもの時間的社会化」，日本教育社会学会第69回大会，一橋大学，2017年10月.

（学術論文・査読あり）

大久保心，2017，「就学前教育で生じるタイムマネジメントの分析視点」『時間学研究』8: 1–17.

注

1） ハビトゥス概念を用いてエリート高校を対象に学校文化の再生産と変動を論じた黄（1998）によれば，入学時には家庭のハビトゥスが学校のハビトゥスから離れていても，生徒のハビトゥスが学校生活を経るうちに学校文化への適応に向けてある程度の変容を遂げ，学校文化の共有に至るという。学校が，家庭の差異を露呈するとともに，生徒の変容を促す機能を有する点から，就学前教育の園についてもそのような機能を考慮に入れて検討する必要があろう。

2） 保育所における「保育士」，幼稚園における「教師」，認定こども園における「保育教諭」について，本報告書では一括して「先生」と表記する。

3） 調査対象である就学前教育の施設についての概要を説明する。調査対象とした施設は認定こども園X園と保育所Y園，保育所Z園の3ヵ所で，すべて西日本に属する私立園である。X園は有限会社であり，A県にある人口

30～40万のa市の住宅街に位置している。0～2歳児が約20名，3～5歳児が約70名所属しており，3～5歳児クラスの所属人数はほぼ同じである。また，3～5歳児については，午前中の学年別活動を除いて原則的に2つの縦割りクラスで生活する。Y園は社会福祉法人であり，X園と同じくa市の住宅街に位置している。0～5歳児が約100名所属しており，3歳児からの入園する園児はほとんどいない。Z園は社会福祉法人であり，B県にある人口5～10万のb市に位置しており，住宅や田畑に囲まれている。0～5歳児が約120名所属しており，Y園と同じく3歳児からの入園ケースはほとんどない。

4）網掛け部分や太い矢印部分は，分析結果として最も頻繁に現れた事例の概念・カテゴリー同士の関係を示している。

参考文献

Bernstein, B., 1971, *Class, Codes and Control, Vol 1: Theoretical Studies Towards a Sociology of Language*, Routledge & Kegan Paul.（＝1981, 萩原元昭編訳『言語社会化論』明治図書.）

黄順姫，1998,『日本のエリート高校――学校文化と同窓会の社会史』世界思想社.

浜日出夫，2013,「クロックタイムの成立と変容」山岸健・浜日出夫・草柳千早編『希望の社会学――我々は何者か，我々はどこへ行くのか』三和書籍: 233–245.

Holloway, S. D., 2000, *Contested Childhood: Diversity and Change in Japanese Preschools*, Routledge.（＝2004, 高橋登・南雅彦・砂上史子訳『ヨウチエン――日本の幼児教育，その多様性と変化』北大路書房.）

木下康仁，2003,『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践――質的研究への誘い』弘文堂.

胡中孟徳，2017,「中学生の生活時間と社会階層」『教育社会学研究』100: 245–264.

Moore, W., 1963, *Man, Time & Society*, John Wiley & Sons.（＝1974, 丹下隆一・長田攻一訳『時間の社会学』新泉社.）

森一平，2009,「日常的実践としての『学校的社会化』――幼稚園教室における知識産出作業への社会化過程について」『教育社会学研究』85: 71–91.

清矢良崇，1983,「社会的相互行為としての初期社会化の様式――しつけ場面におけるカテゴリー化問題」『教育社会学研究』38: 122–133.

柴野昌山編，1989,『しつけの社会学――社会化と社会統制』世界思想社.

芝田奈生子，2005,「日常的相互行為過程としての社会化――発話ターンとしての〈泣き〉という視点から」『教育社会学研究』76: 207–224.

結城恵，1994,「社会化とラベリングの原初形態――幼稚園における集団カテゴリーの機能」『教育社会学研究』55: 91–106.